

プロ野球応援はなぜ盛り上がるのか —宗教という観点からの分析—

HS24-0124K 川幡 小珠美

1.はじめに

プロ野球の試合中の球場においては、多くのファンが最前球団を声や手拍子などを用いて応援する姿が見られる。勿論球場にいるからといって全員が熱心なファンではなく、レジャーとして文字通り観戦しに来た人もいる。しかし試合の盛り上がりと共に応援が過熱すると、それまで熱心でなかった人まで加わり、スタンド全体が一体となって同一の応援行動を行うのである。

本稿は上記のようなプロ野球応援の盛り上がりなぜ発生するかを宗教という観点から分析するものである。これはプロ野球応援におけるスタンドの見知らぬ人同士を一体化させ、時に川に飛び込ませるような熱狂を与える点に宗教との関連性を見出したためである。しかし宗教を一概に定義づけることは難しいため、本稿ではデュルケムの示した宗教の最も骨格的な定義を用い、「プロ野球応援には宗教的要素が存在するために盛り上がる」という仮説を証明していく。

分析方法は主に文献研究であるが、実際に球場へ足を運びファン集団の中で共に応援することで参与観察調査も行った。

2.デュルケムによる宗教の定義

デュルケムは宗教の最も骨格的な定義を「宗教とは、神聖すなわち分離され禁止された事物と関連する信念と行事との連帯的な体系、教会と呼ばれる同じ道徳的共同社会に、これに帰依するすべての者を結合させる信念と行事である。」とし、全ての宗教には本質的諸要素が必然的に共通しているとしている。私はこれを受け、逆に考えれば共通する本質的諸要素が存在するものは宗教と言えるかと考察した。このため本稿では、この定義にプロ野球応援の要素を合致させることで仮説の論証を行う。

私はこの定義において宗教、神聖すなわち分離され禁止された事物(聖物)、教会の3つの関係性が重要であると考察し、対象をこの3つとその関係性にあてはめることが出来れば宗教性の存在を

認めることができると考えた。このためそれぞれを「宗教：俗のものとは隔てられた聖物に関する信念と儀礼との連帯的な体系」「教会：儀礼によって信念を表現し結びつく社会」「聖物：ただの人よりも高級な力を持ち、俗の世界から分離されているがただの人に依存している」とし、これらにプロ野球応援の要素を合致させ、その関係性を考察していく。

3.論証

3-1.教会

これにはファン集団が合致する。社会心理学者の小城英子はファン心理を「直接的なコミュニケーションを持たず、主にマス・メディアを介して知り得るタレント・アーティストに魅力を感じる」と定義し、スポーツファンについては特に「尊敬・憧れ」の要素が強く、ファン同士の交流や連帯感を強く感じる「ファン・コミュニケーション」が魅力の要因であると述べている。上記から私は、プロ野球ファンのファン心理は「選手をファン同士で共有することに喜びを見出しており、選手を生き方の手本として崇拝している」状態にあると考えた。

そしてデュルケムは「教会を構成する諸個人は共通した信仰をもっていることだけで互いに結びついている」と述べており、これは前述のプロ野球ファンのファン心理に当てはまると考えられるため、プロ野球のファン集団はデュルケムの宗教の定義における教会であると私は考察した。

また、人々が教会という社会を形成するための重要な要素が儀礼であるが、応援行動もまた儀礼であると私は主張する。現在の日本における野球応援では楽器やメガホンなどの道具、統率された声・手拍子を用いて集合的な応援を行う方法が一般的である。これについて高橋豪仁は「観客の応援においても定められたやり方があり、その型が繰り返され、いわば応援が世俗的な儀礼となっているのではないだろうか。」と指摘している。これらはデュルケムの定義する「人が聖物に対してど

のように振舞うべきかを規定した行為の規準」という儀礼の定義と合致すると考えられ、プロ野球におけるファン集団の応援行動は儀礼であると言える。

3-2. 聖物

これにはプロ野球選手が合致する。本稿で扱うプロ野球選手は日本野球機構に所属する球団に支配下登録されている選手を指すが、その人数は2014年時点で728人である。同年の日本人口は1億2713万6千人であり、割合では600万人に1人しかプロ野球選手になれないということになるため、ただの人より高級な力を持つ者しかねない存在であると言える。

またプロ野球は他のプロスポーツ同様、試合を行うことで観客から入場料を徴収し、それを球団の利益や選手の報酬としているためプロ野球選手はただの人がいなければ生きていくことができず、ただの人に依存していると言えることから聖物に当てはまると考察した。

3-3. 宗教

これにはプロ野球の存在自体があてはまる。俗と聖をつなぐ宗教が存在しなければ俗と聖は隔てられたままである。同様にプロ野球が存在しなければ高級な力を持った選手たちも聖物にはならず、またそれを応援するファン集団も教会にはならないと考察した。このため宗教はプロ野球の存在自体であるとする。

3-4. 宗教・教会・聖物それぞれの関係性に対しての当てはめ

まとめると、ファン集団は応援行動というチームを勝利させたいという願望的信念を表象する規則化された儀礼を行う。それに対して野球選手はファン集団の応援に應えるのである。デュルケムは人と聖物の依存は相互的であると主張している。ファン心理の研究において「共依存的感情」の要素が強く抽出されたことや、プロ野球選手がファン無しでは生きてはいけない存在であることなどを踏まえると、ファン集団とプロ野球選手の共依存関係は人と聖物の共依存関係と同一であると考察した。

またプロ野球が存在しなければファン集団は教会にならず、選手も聖物にはならないという関係性も、宗教の教会と聖物に対する関係性と同一である。

上記から、宗教の定義と合致するプロ野球の諸要素は、その関係性まで宗教の定義と同一であると言える。また以上により、宗教に共通する本質的諸要素が存在し、その関係性も同一であることから、プロ野球応援には宗教的要素が存在すると言える。

4. 仮説の論証とまとめ

以上の考察より、「プロ野球応援には宗教的要素が存在するために盛り上がる」という私の仮説は論証されたものとする。そしてこれにより、プロ野球応援の盛り上がりの正体にたどり着く。その正体は集合的沸騰であると私は考える。デュルケムは「氏族の集会の中で執り行われる儀礼では、聖なる事物に関わる共通の観念ないしは感情が、共通の儀礼的行為によって表現され、強化される。この過程を通じて、諸個人の意識は合一ないしは融合の状態に達するのである。」と述べており、集合的沸騰については、「諸個人意識の合一による集合意識の活性化が極限に達した場合に、しばしば集合的な超興奮状態あるいは極度の高揚状態が出現する」現象であるとしている。またデュルケムは「宗教的思考が生まれたと思われるのは、これらの社会的な沸騰した環境においてであり、これらの沸騰それ自体からである」と述べており、人々が盛り上がり集合的沸騰が起きた場合に宗教的な力が発生するとしている。

上記を用いてプロ野球応援の分析を行う。チームを応援するという集団の共通の感情は信念であり、また応援行動は儀礼である。チームを応援する信念は、応援行動によって表現され、強化される。そしてファン集団はこの過程を経てそれまで以上に統率された応援行動を行い、大いに盛り上がるのである。この一連の流れはまさに集合的沸騰の現象と一致すると言える。つまり応援が最も盛り上がる際にファン集団は集合的沸騰の状態にあると私は主張する。

以上から、プロ野球応援の盛り上がりは集合的沸騰であるとし、またこれこそがプロ野球応援に宗教的要素が多く存在する最大の理由であるとす

る。そしてこれらがプロ野球応援に対して宗教という観点からの分析を行った本稿の結論である。

参考文献(一部抜粋)

デュルケム・E、古野清人訳、『宗教生活の原初形態』上・下、岩波書店、1975年

加嶋結喜、『プロ野球の集会的応援活動という空間～東京ヤクルトスワローズファンとしての参与観察・聞き取り調査から～』、2011年

小城英子、「ファン心理の構造(2)ファン対象の職業によるファン心理・ファン行動の比較」、『関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究』、62号、pp.139-151,2005年

高橋豪仁、『スポーツ応援文化の社会学』、世界思想社、2011年